

私を育てた
あの時代、あの出会い

第9回

より良い授業を追究する恩師の姿に 教師としての存在意義を学んだ

福島県 福島市立福島第四小学校校長 **丹野学** TANNO MANABU

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、丹野校長が語る。

「学びの出発点は子ども」 大切な前提を学ぶ

人は誰でも磨けば光る部分を持っている。子ども一人ひとりの良いところを見付けて伸ばし、自信を持たせたい。教師を志したのはこのような思いからです。

その信念を体現するため、新任の頃から、休み時間も放課後も出来るだけ子どもと一緒に過ごし、一人ひとりを理解しようと心掛けていました。授業も工夫しました。「先生の授業はよく分かる」と評判は上々で、子どもたちの成績も良く、教師として

の自分に自信を持っていました。

しかし、そんな私の自信は、福島市立野田小学校で、1つ上の学年を担当していた佐藤吉郎先生との出会いによって打ち砕かれました。教師になって6年目のことです。

当時の私は、強力なリーダーシップで学級経営を行い、子どもに強く指示することもよくありました。ところが、佐藤先生はほとんど指示をしていないように見えませんでした。合同で行っていた特別活動では、子ども主体で全てが進み、子どもの表情は生き生きしていました。「こんな子どもの顔も、教師のかか



たんの・まなぶ 専門教科は算数。福島県公立小学校、福島大教育学部附属小学校、福島県小学校長会事務局次長などを経て、2010年度から現職。2011年度からは福島県小学校長会会長も務める。

1976 (昭和51)

新採として
相馬市立飯豊小学校に
赴任



飯豊小学校に
新採として赴任した
当時の授業風景

1986 (昭和61)

福島大教育学部
附属小学校に赴任

1992 (平成4)

伊達郡保原町立
大田小学校に
教頭として赴任

1995 (平成7)

福島県教育庁総務課
管理主事に着任

1999 (平成11)

伊達郡飯野町立
青木小学校に
校長として赴任

2006 (平成18)

福島県立
双葉翔陽高校に
校長として赴任

2010 (平成22)

福島市立
福島第四小学校に
赴任

「授業は難しい。だからこそ 謙虚に学び続けることが大事」



わり方も見たことがない」と衝撃を受けました。こうした表情を授業で引き出せない自分が情けなく、また悔しくもありました。

今でもよく覚えているのは、運動会の準備をしていた時のことです。子どもたちが運動会を盛り上げようと、トイレトパーペーパーに応援メッセージを書き、屋上から垂らしていました。他の先生たちは「紙を無駄にして」と渋い顔でしたが、佐藤先生はその場では注意をしませんでし

た。そして、子どもたちの気持ちを認めた上で、最後に「これ、どうするんだ？」と一言問い掛け、考えさせたのです。子どもたちはトイレトパーペーパーを巻き直し、トイレに戻しに行きました。

「細かく指示をして目標が達成できても、それは子どもの力にはならない。今の指導では駄目だ。変わらなければ」と感じました。学びの出发点は子どもの中にある——教育方法論以前の前提として大切なことを

佐藤先生に教えていただきました。
子どもに自信を持たせてあげられるのは「授業」

その後、赴任した福島大教育学部附属小学校で出会った笹川直樹先生も、「授業をつくるのは子ども」という信念を体現されている方でした。笹川先生の授業では「先生、駄目だよ。自分たちでやるよ。これはこうするといんだよ」と、子どもが授業を引っ張っていたのです。笹川先生は授業中、徹底して「駄目教師」を演じ、一方で子どもの学ぶ意欲を見事に引き出していました。こうした授業を成立させるためには、綿密な事前準備や教材開発に加え、子ども一人ひとり、そしてクラスの人間関係もしっかり理解しておく必要があります。「すごい先生だな」と感銘を受けました。

笹川先生とはよく一緒に出掛けて「このバスの料金表を授業の導入に使えないか」など、子どもを学ぶに向かわせる材料を見付けては、議論を交わしました。「教師は授業が勝負。子どもに本当に自信を持たせてあげられるのは授業だ。だからこそ、授業中はもちろん、普段から本

気で子どもにかわり、理解しようとするのが大切」という思いを更に強くしました。

しかし、授業は本当に難しいものです。振り返ってみても、全ての子どもの学びが保証される100%の授業が出来たことなど一度もありません。だからこそ、更に子どもに寄り添い、理解しようとする。授業課題を解決しようと、自分に挑戦し続ける。この謙虚に学び続けるという姿勢に、教師の存在意義があるのではないのでしょうか。校長となり、私の役目は子どもに直接かわることではなくなりました。今度は、子どもに寄り添う先生方を支え、守っていきたくて考えています。

福島県は東日本大震災以来、いまだに多くの問題を抱えています。学力の低下も懸念されます。しかし、厳しい時だからこそ、先生方には授業を大切にしてほしいと思います。復興の担い手である子どもたちの学び心に火を灯し続け、確かな学力、生きる力を身に付けてあげることが教師の役目。学校は復興の最大の拠点です。こうした自負を持った教師集団をつくれるよう、現場の先生方に語り掛けていきたくと思います。